

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 30



全十冊曲亭主人著編

里見八犬傳第八輯

下帙

五之卷三十丁

五

丁子屋平兵衛著

表
年
月
日
下



Kodak

LICENSED PRODUCT

© The Tiffen Company, 2000

Black

3/Color

White

Red

Magenta

Yellow

Green

Cyan

Blue

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

紅毛外見、以下列ニあり
ス合色アツコ画キ

新奇八犬

八行傳

曲亭精著

二四篇

柳川重信画

第八轉下稿
文漢堂師發



五



紅毛者形小自和名以魚
肉琉球革等物若以葉未滿
肥大而小且合體而身毛也
毛者高頭圓毛厚身毛薄也

八大傳第八轉卷第五附錄

江戸麻布長坂の日向寄りみ穴をと名をは地名れが和さみみ。涼涼が江戸砂素
唯狸穴と書う。雌狸をしてことの義哉。何よ據ども。るるかて。見原益軒の大和
本草より。獵をてこと。篤信云てこ。ミタヌキトモ云。野猪ニ似小す形肥
脂多ク味ヨクシテ野猪ノ如レ肉ヤワラカ也。穴居ス其四足ノ指各五恰
如人手指。獵師定テアスベテ捕之行クコト遲シ。獾ノ獵の類ナリ。狗ニ似
ダリ並ニ穴居ス。といす。又本草綱目。五十一。獵の下。小猪。若水。和名ニ刺
入マでこと。李時珍云。獵而猪獾也。獾狗獾也。二種相似而畧殊。狗
獾似小狗。犬喙。矮足。短尾。深毛褐色皮可爲裘領。といす。かどり。
和名をてこと。獸。蓋。斬。若水の二老翁羽。一ハ。獵をてこと訓。一ハ
獾をてこと讀。サル。訛。ふ。訛。世俗の稱呼。從。の。秋金梅玉也。



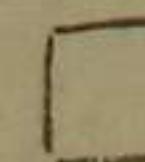
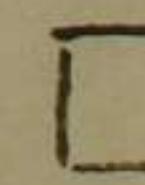


魔鬼魅事通
ノミ題

遠きるや今才世人の小兒と權をも。人全あつて。鼈壳の形りと。かゑる元
め氣がまみ虎の名の高うけ。是等はとくに。是等はとくに。是等はとくに。
棲まぬものと。かゝるて。宍瓦。土俗。これをゆく。又説う。まん丸を。ゆく。か
まく。見聞。則。かまく。金を。ゆく。仙を。まみと。すれ。方言。多。教取。考。事。
安水七年の夏。西園橋の頭。かく。鷹。千。さ。を。ま。の。ら。ん。が。と。す。と。す。
が。と。す。と。す。即。猪。今。も。現。う。鼈壳。か。あ。ど。然。そ。若。水。の。權。と。ま。と。和。訓。せ。り。鷹。と。權。と。鷹。と。
の。お。共。み。宍。居。を。做。と。あ。れ。鷹。の。和。居。と。こ。じ。ら。ふ。對。と。權。を。ま。み。と。り。す。ま。と。よ。
ま。み。の。ま。わ。り。ゆ。す。と。鷹。と。ま。る。の。義。威。象。文。愚。説。の。鼈。鼠。類。之。宍。居。是。物。を。ま。と。る。
自。身。の。意。不。憑。る。名。希。と。と。す。と。す。と。す。と。す。と。す。と。す。と。す。と。す。と。す。と。す。と。す。と。す。
作。と。相。る。虎。の。義。威。象。と。す。不。守。當。き。べ。江。戸。の。地。名。を。説。で。す。の。か。と。す。と。考。す。と。す。
迷。徳。の。り。す。柳。本。輯。第。七。卷。ま。み。宍。の。と。れ。此。思。考。を。附。録。と。下。帙。引。代。空。

天保三年壬辰夏五月中浣

笠表笠漁隱識



南總里見八大傳第八輯卷之五

東都 曲亭主人編次

第八十二回 得失地を易く勇士厄に遇ふ

片袖褐を得て賢女獨知る

復説大付大角へ大飼現八共侶よ。とひかゑ莊客們の推捕飼て敷とせと。事
何事ぞ。と。か。う。小。驚。ん。と。此。可。怪。ま。ば。齊。一。声。と。物。立。と。人。と。陳。多。の。所。經。ま。せ。そ。
俺。们。は。是。旅。人。と。素。う。怨。の。怨。を。認。錯。矣。後。悔。ゆ。と。と。所。多。と。肩。置。ぐ
と。但。よ。闇。く。と。中。よ。先。よ。找。う。兩。三。名。持。る。棒。と。突。立。て。化。と。疾。視。る。冷笑。ひ。そ。
喧。偷。児。の。悍。を。と。む。這。期。よ。及。び。と。分。説。听。ん。や。鷹。よ。若。们。か。と。飼。と。衣。箱。か
其。首。よ。か。遂。よ。免。と。放。天。四。訓。あ。と。と。く。快。く。鄉。緯。の。索。よ。被。ら。か。勇。事。ひ。
阿。責。の。苦。痛。と。さ。れ。ん。然。ま。自。ま。の。え。も。と。努。ひ。猛。く。罵。と。と。熱。す。聲。ひ。

听。人。の。
俗。語。本。讀。書。
石。元。書。

二大士に面頃の是へて。ひよる腰を折り。両刀を本吉の程を奪う難て。左右をかく。金打を蒐らる。さすが捕縛するのそれ。既にそばへ便りて。はるか大角の徐。かね又衆人より對ひて人々太く謀だよ。俺ひより。せばねか。俺も亦向の程穂北頭の駿雨。逐れて連りよ走り。折背ふまる行裏で。盜児よ。搔攫ひよ。趕つゝ。這里よ。才よ。けいひ。文黨と脅えん。縛者。遠衣箱の尻を搔く。堤の上。相手を。登時此彼両個の賊。近づ。俺甚寄せども。推並ひ力と。勧まし。且く桃戦ひと。矢庭。蹴倒。投伏せ。直ぞ撲殺ん。刃ひ木よ。そよ。摺り勢ひよ。怕懼ひ。共。侶。終阿。猿唇。因ひ。前岸へ逃げ。余よ。折俺が行裏へ。懷を河へ蹴落せ。又。盜児が。搔攫ひよ。もたれ。き欲。あ。ど。よ。逃。残。俺東西。改。遠衣箱の。も。と。ば。亦現ハ。衆人よ。うち對ひ。各々あれ。を。られ。欵俺。ハ。聊足を。傷り。後れよ。けれ。ハ。那期。み。あ。ど。さ。又果て。這里へ。まよ。れ。送。恨。か。こ。き。う。と。熟思へ。ハ。遠衣箱も。那盜児们。が。遠。ア。及。里。入。の。象

至。ち。た。船。取。て。そ。事。よ。は。と。重。や。荷。卸。と。後。作。火。家。を。俟。て。放。是。も。ホ。零。ハ。今。を。生。在。需。ひ。て。返。ま。が。と。俺。ひ。よ。不。俺。友。も。心。か。事。下。惻。隱。の。誠。れ。裁。す。浅。を。現。俺。が。東。西。と。它。窮。も。人。の。東。西。と。妻。ひ。か。の。情。等。一。か。ひ。よ。快。近。脚。よ。趣。を。と。報。て。主。あ。が。わ。す。ま。べ。と。商。量。の。折。す。は。よ。果。て。違。ひ。を。各。々。も。亦。那。盜。児。を。趕。つ。未。ゆ。事。情。と。既。よ。推。量。を。れ。す。情。由。ゆ。の。听。ひ。俺。们。と。疑。き。田。舍。児。の。恐。ひ。尾。傍。所。ね。す。へ。ほ。ま。く。言。語。を。聲。し。も。脣。蔽。れ。が。是。非。よ。及。せ。ば。士。と。る。の。盜。賊。濡。衣。と。被。き。亂。す。阿。客。々。と。田。夫。野。人。の。綁。縛。を。受。へ。ば。や。俺。们。二。名。死。を。參。す。で。大。か。折。れ。勢。ひ。究。除。ま。ぐ。擊。す。が。千。軍。萬。馬。と。の。然。靡。絶。と。疑。ひ。一。聲。を。況。や。農。夫。野。老。の。才。よ。十。名。十五。名。擊。す。倒。え。ひ。と。易。か。可。惜。命。と。限。え。う。疑。念。と。霽。す。這。衣。箱。と。合。ま。く。去。が。俺。们。が。素。う。望。む。所。と。迷。ひ。と。取。ら。凶。死。の。觀。面。一。人。身。と。も。墨。す。運。ん。と。ら。ハ。が。ど。然。す。挑。む。欵。年。寂。と。寂。園。徵。へ。も。勇。士。の。奮。激。刀。の。輝。甘。げ。と。寄。

と睨むと眞と氣色よ憚る壯僕们八名とぞ口傾ひと肩一後方とぞかね
達し抜め那口車より乗せられと逃れと露費推す二隊の壯僕肩力競急深
留めのを争ひ果てあはげるが中より一名の貌あり罵り已故壯僕但推
鎮め其を退廻すと一五名の大衆其首より立聚ひ額を集め商議の折々這
方とそるもあり頷くわゆ笑もあり既に商議一果す夥計の莊客二名をもとや衆
人より立別れと穂先へ走り登時壯僕们と鎮める件の莊客一两名堤下
我舟にて立ち對ひと微笑有て小舟を届め刀被達先をめかし理も非も今壯
僕們の宣すと思ひもよ太く至礼候と辭解れ現八大角八共侶と點大頭て人少らば沙
連俺们がりひと信宿と金疑ひと釋れし歎と問丈えとさしの衣箱と
と玉の盜兒のきの類嘗すとぞ疑ふと又云云とくわあねどつ不老多衣箱へ
等内が衣裳あれど是東人の東西也。又那盜兒们何の直轄駕籠を逃げと想ども

及ぶと空う無能ある。那盜兒と捕捉ひて葱より皮箱方と會ひと是の
うち俺们をそ疑へれ願六刀被達俺们と傳は東人の宿所よりりと那盜兒の爲
体と画前より説知ゆ。初より俺们が六耦さりと會得せれん這義と差引ひひ
かと憲むと現八共侶とぞ警意味あり及へ一什麼汝達の東人化宿所へ這里より
遠う。や原是豪家竹村長秋從類三とくあると白晝不惑の入る者も是等の
東西と交絆しん故ゆと於甚麼事と再向へがて此に皆竹東人の穗北梅田柄原達
痴呆者吉て水垣茂三夏行と喰做と御士ひて内儀の墨表とせとぞ。家より萬
戸と酒食を只一箇の女児あり三種をもとめ比落鯛鱈之七有種とよ。壯僕と女婢り。田園の業を任用して自身の宿所を喜甲斐は今朝も貸しを積藏。小屋の下へとえぐく穿ち
た穴を塞ぐ。僅僕们吟呻て内に東西をもとめて修復の時の程りか。生平う
後れ。晩飯と晩茶とと魯ち。跡あ心づなしく寧時危険は退ざる折と想は盜兒が

背門 うそと潜ひ入る。出指る衣箱と駄モチスとせ 程々一個の小廻が廻より立
出。とれこれを多く盜見ありと叫び、又盜見へ這声よ驚かれて衣箱をも終其首より
捐モ荒すせん背門へ走り度を遠く拘櫓は蓬籬を潛と逃亡し程一もあらず人の喧も
咸庵福う走り来く容子と同へ不盜見る所外去て東西も取らむ折多猛可は降る雨
出で 東西と濡れとよめ被せ積藏へ納つ花が衣箱の五箇と四箇と一箇に足らず
身不寄原来件の盜見り一人をも支當はりまし他も先も今も奴がるや一箇の衣箱と貨
物を逃す者も然と知れ由斯より聊時の後れにて遠くから御恩と罵
謀ぐ圖室のか擇主の家頼り血眼より詮議を做と程々田園より農奴の
那驟雨と稻外あそ濡れかす車えけの主人の邊より招聚をもよと示す御て定め
一隊の竹塚一隊の梅田柳原又竜門へ千往のとと枝て这首をぐるて心の情ゆ
ひが那盜児と捕捉をも。衣箱をも見かずかと重文と疑ふて外をも見ゆ財をあうと
ひが那盜児と捕捉をも。衣箱をも見かずかと重文と疑ふて外をも見ゆ財をあうと

正義 やがれのうそと潜ひ入る。出指る衣箱と駄モチスとせ 程々一個の小廻が廻より立
まの紛れは貴們が空觸みとて渡を折。小廻よりて裏地半穿敷金壁手く見り。又締結
をうとひ誘ひ既り返して見んと思ひせが身は與てかく貴們が東人の年老れも心
痛。と勇悍くちく武藝あり且て皮箱の歎れの琴常男女の衣裳よりて銀羅短
衣脳甲膚盾皆是秘藏の武器なるべ一枚箱でも重價ありも見えづる重花の那
盗見。近地もとてお詫びを聽ひるんほまく具は告げられ。旅刀と刀柄推留をも宿
所へ併ひお詫びを解き身代金を以て旅費を賄ふ。既小泉等の趣を注進の與仕役。
二名宿所へ還りまし。おどと詫音よ諒かへて長談を稍休果現ハヒ大角點火頭ア現那
程かのとて推辞。後暗に子似す素う意を旅費非サ十町二十町立候をも
厭す尼モとて應て聴く裡會のね客們より對ひていふを趣み意をばう形盜
児をこりへ便是俺のとて俺の奮れ行裏伏合も復さぐるの。おも

うよ。走り各々の證人よ馳る。寛は定と鳥許の所。餘るども前路を急ぐ旅かねば。
そぞ左より右より。また這衣箱。主人の東西と正可なり。證据や。什麼。汎達へ従類歟
又名も少ましれと向化移ふ。兩個の社客送ふ。えくす含笑す。宣よ。趣理りん。乞賄せ
え衣箱よ漆繪を防。抗羽の蝶。酒。氷壇の家の花瓶。紛れず。へもひを又奇門。
那指家。小年來仕る老僕。他。小オニ。奇名。世智を囁き。却東人。這頭。
大。威徳。これよう。奴婢们。穂北梅田。世渡。皆。此。寄
ら。布。當所中奥。開。収の大財主。ゆく。笑。嘗益。もみや。唐年。と。辨。時。釋
ぬ。誘。兒案内。と。ほん。と。後方。と。え。さり。金快來。も。刀。裕達。業。引。セ。ひ。だ。よ
喰。へ。大家。心。と。答。堤の下。と。找。まろ。已前。の。礼。信。語。あり。然。詔。め。俱。笑。よ。立
並。ひ。ち。手。中。小。足。一。個。の。耕。後。堤。あ。登。り。て。二。大。士。よ。揖。讓。と。衣。箱。と。楚。と。駆
搭。不。立。程。小。大。首。現。へ。も。俱。不。徐。手。立。け。登。時。世。智。小。才。二。衣。人。三。大。士。の。前。後。

遠方へと云ふ處より請も登せど毎屋の外面とも遠くなく庭の折戸とも高け角も
一個の若者黒牛と云々世智老僕もあらずと向ひ答へ世智介翁へ那盜兒と趕走
矣皮箱を拿よ止めしゆ旅人達とねえ未よけ快開てよとつまわせん心と回々を修よ
我ニ近着有見鎮と被ひ誘とぞうニ大士は揖讓とく先よ立て書院のまゝ案
内にて當下世智介小オ二人们不外其名の在客も咸ニ大士の後よ跟々但よ庭を入る
は少程よ現八大角又若者黒の案内とせられ雜貨貯庫の後す
詔令を准繕てゆき程よみひもかけぞ共侶よ大地を罵辭と躊躇りて吐嗟化吐ふ程
寺もゆきぞ愕然と仰反す。坎窪み附りて後方よ立ち衆人、獲うちや心と
よ。かくある。かくある。かくある。かくある。かくある。かくある。かくある。かくある。
實に中止して事ふ壯伎のとて件の元より跳入り折重す。現ハと大角とて各半斜々と細め
宇宙は吊りて推抗ると上脇衆人受命すそ多く休檻と推居す。登時現八大角ハ怒鳴
矣。声をあげ立て走りて莊客们奮起言ひて巧みに賺りと云々。これらに
声をあげ立て走りて莊客们奮起言ひて巧みに賺りと云々。これらに

較ある故教誨ヨリ智愚人の本性賊多ア久非義非法今ゆゝ又若们より道理を述べ
を益は仰うト土人を喰ひ對面ト市虎の疑惑を言下よ解ん快喫也と歎園
立きもとて羣林寺社役们的後方あ小オニ世智合共倡議其寄く現ハ之大角にて右見
金矣。迄益泥们立まふ。某庵東合對面と願へよ。誰か物化す無能く対縁西庵
角セモ。既面前へ羣居る。駆て手轍。是をせんぞ。要らん頤を喰んよ。嘗期極て念佛
而唱。子候ね。害れ。世智合が。未即の念霽。ふ。庭自異。名アカ。知無忌と揮ひ
衆人。て鎮め。首尾。計。謀。辯の手段。説示。え。御向。俺们。ヨヌ勢。争。身。す。鐵
帶。さ。の。う。桿棒。農具。の。う。鬼。若们。二名。の。兩刀。捉。取。毛。喰。て。未ん
う。咲。よ。如。と。尋思。い。の。う。の。搗鬼。食。て。殺。陽。あ。美引。宿所。へ。人。走
ら。セ。却。東人。辯。由。計。畧。の。き。と。表。知。ト。画。セ。不。能。道。里。も。事。准。備。す。造。機。事。機。
近。廢。唐。廟。の。修。復。よう。這。頭。の。壞。を。穿。取。れ。る。迹。失。終。よ。あ。て。思。起。セ。俺。妙。

計。穴の上より津波板と並べて壌を掩され、縛立地は成就し、塵と骨と折る事す。や
うひの隨々這個穴を附れり。生泊り現若仰打拂の旅の武士よ似て、とも出没不測の
盜兒を。あやかに黒のある人櫛が木綿と衣物相を傷す。指マる不怯まつて、瞞をと欲
するか折の舉動物のひあ。面龐の外物は似て、且大胆不敵と稱え。癡者へとひきと
罵るを大家急す推禁止め。世智刀添和まの挿入を、揃抽する盜兒。そく詰め
る。東人の名前を磨きと候の爲、快幸立ても急や。とみよ世智介領ひ。寔是は然て快
幸。小立き皆共居下庭の假山うち遠りて、二大士を書院。縁頬近く幸居。そ
然ま頬大角ひ。ゆく怕々氣色。左てゆるす遠衆人より理を演。窟室と辨すとも處
來合ひ。がまかす。頑愚の意ひ鮮か。うり主人の對面先折を俟ひ。まよてどもひる。や
う。まよ。あも。ひむ。こぞ。まよ。かのさん。ざまん。りん。くふ。
勇士の躬隠黙然とく。筆を大川、大田が去歲の夏那片目の別館を力士ふ揃捕を
す。傍を先と後。此彼冤屈の鄉緋獲れ。陽虎は似て、陳秦の阮を。べと白龍魚

服ふせゆが余且の綱よべくも梅薔薇春よ魁玉雪霜且これと痛め、後は微妙の香
や。豪傑よ時を遡れ、造物連ふ厄に遇へて終は一世の功名あり者官下まく讀む
果またひるそ尾目の一段み似たりと不すもあくん翁とく作者の自注と下巻水滸西遊水滸
重複と異き。同話休題却説當家の主人と坐し、氷垣残ニ夏行ハ舊不盜児と捕捉
候農民此彼と取く許よりの人と部へて四うへ出づて趕せり千住の三浦趕候。
世智介と小オニう大家の壯健二名とす内通すをう焉良、猛可と銀棄た遣し、半木と候
程よ世智介仰ハ両個の賊を欺詐の俱くとある計りしが件の元へ附くと捕
否や若黨黒が報一ふ。嘗ても鳴り作雀躍したる遠夏行へるの餘り既長南の七瀬過す
也や。きこひきさきとを生憎毒の風波立騒ぐ乱色す。せう衰風威風の鬼子撻ねて最も遙かに
す。俺知る四下へ益児も怕れて徘徊もあらずと心寛見。由前の大敵もす。青天白日よ。
潛入東西を竊みて其奴们を今斬キ棄て何ともてゐの後を懲え。身比賄ひす。



個の老僕へ笑ひて頭を擡げ膝ひざを打うめ大老爺御覽見せよ竊竊去られ衣箱いばこ千住堤頭あり。食事復しりひだ又語兩個の盜鬼を稍宿所まゝ誑引寄せ。并に掛かて生拘るまゝの計の趣おもれ御高たか往進むか爲ためあわせる壯健そうけんの状じょうあり大抵知しせぬひは捕つかる盜鬼。勿入則そなへ此こども傍そば見ええば夏なつむ屋點火頭やかのて優やさく若わがらわがの様ようを愛あむ。一俺ひとわら千邑せんぎょ不ト居ゐまゝ地ぢをひひ辰ちゆん勵はげめ穗北梅田柳原はいほくうめだやなの三御みごと再興さいこうせよ既すでに四十餘年上うは督そと領主りょうしゆ下くだす役除わたり民みんを今戰國せんぐの沿習えんぎふゝ耕うモリも刀とを跨はへ氣きるもも戦たたかを携なへ歎なげ妻めと親おやぢ皆是武ぶ勤げいを疎疎くと就つ中なか俺三御さんごの人の心こころ一致いつして重じゅう耳じゆう。莫まだ夫おを守まり賛さん朴ぼく身みへ足あしむと義ぎを以もつ争あらわく。夜よも鎮ちかねどり盜賊とうぞく入いど路じ送おせ。東西とうざいを拾ひひ併あわ俺武勇うぶゆうの致いたと研とと遠近人とんじんの羨うらやむすけよ近ちか屬しゆ蜀しよく河かより遠とお方ほうを盜賊とうぞく俺宿所おとこ外ほか賊賊の土足どそくを汚おす。剣武器けんぶきを定さだめ名實めいじ是これより衰こへて都と御ご人ひとは侮あざふ。而ひて徘徊はいはいと告おるありか。拙鬼しょくひと云いひよ。あひ言こと黒くろく連つらひく人ひと羨うらやむよ。ふくらま。おまへふき。多おおま。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。おとづれ。

逃ごとく迹を送りて這片袖を豈ちや駆騒の天衣用耳。比うては必其奴們よ襦
袴の片袖をすのあん衆人等へ。と而へ大家さしに剛才這奴們両名と繼る行初マス
テ。左よりする盜兒の襦袴ハ断離れア先袖み。あつも此彼相似と言渡葛木編にてと
り多と大角えたりて人々知る所あり。俺這襦袴の片袖を束ひて娘かく兩個の賊を
捕えと。桃う折る引影難くれど風ふ吹く川へや落けん系へがもあ。娘たどりセモ累
るあん。あく夏秋乃ハ呵々とうち笑ひ。徳まそ證据分明ある。身草あらそ慙の癖者。足骨と拘泥す
道をせん。蹴づれ蹴例せ喧々と寢園。けども既よ驚く。衆人の羨みと答ふのを
又歎たる。蹴られや。足と拂ひ散たるや。また左を窄て困ど。唯こ難しか。
あつれ。夏秋の焦燥。ひつかひも取て弱虫。何う。莫ニ。寝房の和室。二個の賊。今夕。怕きとや。あ
まく。金をす。多も。まさ。ゆう。あつ。又。壁。保輔張樊。は。捉。も。男。あり。術。あ。とも。重索。掛。細。ざ。れ。襤。の。數。裏。取。も。傍。毛。を。そ
えよ。と。後方。若。苦。黒。持。セ。一。刀。を。接。合。ひ。強。く。稼。頬。よ。走。下。ん。と。程。よ

云ひかれて屏風の背ふた鰐庫ある。女子あり忽地下声とかけりやよ等の豪貴の大人画を
へてうけ取る。權且筆せりひと唱林立へ處へく屏風の端に移りて見れり。別入す。
ひる年招婿へて落第餘之七有種は妻マリとヤソする主人残主夏井が獨り鬼の重戸
あり若田下重戸へ屏頬より走りて父よ對ひ。嘯みを公徳宣示され渡り女子の身の程す。む
ちぬまへて母舍長へと。此のゆがわらと伊と盜賊詮議の御事の高柳の白月安らね
端近う少々已前より那里より一五一十を咎むを。闇窺わまつ。あくたがよどく疑ひ居不の
竹子人の心の好歹の相貌によしめのゆう捕捕られ、旅人達があいひる人柄えを鶴盜とも
云ひゆ似を勿論。離れ、荷物の袖れ遠里を送りてゐるが、左を右を動たまひ舞の譜ふ
れられ。那木をも堤を、趕綱うち、盗兒の爲め引れ、片袖て裏ひきとのどが実ちえりうせん
かのこ。あくたの云ふて。ときや。うら
那身を。實縁の是禍鬼の所為なる。とくも。只官の惱りく見えぬが最も最憐れむ。か
く。後悔す。自ふ立かう。且この虚実と舛ちて證人へ外をも舞の初益見せん出せ

小廻の還ると僕マ那人々をえする。牆を潛りて逃亡。盜賊ハ那旅人歟。別人の立地也。
疑ひを解く。既に捉徑もまわぬ。既に追我をさうと林示めまうと名。知ぬ那人達の娘也。
子モ罪疑シカ。ものと殺すがよ。孫のせまく。宗家を受ると。その物の本も傍も。賢。愚も因
め。旋一のひねかと舞う。虎義と推す。獨感。眞賢。女の諫言耳。迂々と夏絶行。然も因
愛。又女のみ情。腹の病。座す。諾ひりせど。てうちゆき。冷笑ひ。憐む。不のぞ。心も廢む。
是婦人の仁。いゝ隨は做を形。か。雖言は刃を借る。似て世の胡慮。よきんの。牆を
潜り。盜兒を認。一小廻。泊。吉之。他。南へ。追。一隊の追捕と俱。よきか。
ね。と。還。を俟。うそ。日方。正。一。證據の元。袖。う。と。蓋。そ。と。正。千。足
と。こやち。の。見。若く。と。足。の。小。猴子。の一。言。復。向。を。尋。う。あ。ん。や。朝。の。物。の。多。見。寛。衣。の。脩。化。粗。費。と
い。と。厭。つ。ね。厭。つ。云。云。と。の。う。を。相。応。が。疾。傷。痛。た。女子。の。裁。判。益。あ。ん。意。見。聆。耳。矣。が。
も。うち。左。右。と。寝。と。室。戸。を。や。推。返。と。無。ま。よ。思。召。み。力。及。ぞ。覺。が。餘。之。七。刀。袖。ま。

た還下と況やせハ母刀自の三晩ありてとん憤りよ紛れよ忘れゆひ欲い事多翼立まゝ呵責を
禁下りテ那夜、數素指れぬ遂よ虛室の安定よ知れ。御後悔をすむよ。這詔の一入
願しをえをせとまづ語。浮世の秋を身よ白る脆た渡の夕霧路や茂が下のサル瓦
くねくに直く怜仰させ側聞。二大士れ憶ぞ目と目と對さ。まごよ大禍よ慮一て十室の
邑も忠信ゆとひけり余ハ悍名百丈引由言のニ道理よ迫れり。沈吟よと半晌許を
くふ領ひア。やよ座へテひき想寃よ由多。日薦萬吉入を任よ。有種も羊も遷よ。且
亡者の命日忌辰又非如罪人よ。とも殺をと要ひ。所折り。へ。併れハ体の願ひよ儘
聲ま。一室。用簾。指人。限脇。身折。よ。と。五。を。渡。を。と。然。と。慰。り。外。回。え。す。あ。在
り。う。ひ。と。
衆人。と。つ。う。と。少。く。と。ん。又。盜。見。仰。成。那。里。多。金。樹。室。よ。閉。簾。そ。緊。く。鎖。ト。一。兩。名。
送。代。よ。原。成。又。那。奴。仰。兩。刀。と。呪。一。箇。有。色。裏。火。室。と。且。預。指。予。有。種。か。ア。無。う。と
告。え。せ。よ。か。清。毫。毛。の。情。取。破。す。隨。草。あ。を。然。者。と。あ。れ。か。と。お。ん。衆。人。命。信。

第八十四回

夜泊の花舟　田舎娘　士を有
すより。幸うる事　せうごう
逆旅の小集　妙は御豪と懲毛
まほり　めい　ごう　と　むさ

秋の日暮れが短くとも黄昏より隨て角笛吹笛め衆僧の藤倉日主翁と一席でも

日ハ疎鹵。ヘ一徳の奴家支那疑ふ仰れとも非如かん身は要吉又ありとも奪去され
衣箱をとり復して在ハ這盲目ニ損テ。然ニト執念深頑ニ斬元と云ひ又よりも良人を心
いづく恨がリ今すもあれかと云ふ。トテアシガ包地より。居敷といふえの折家が諫る
ともソラアテ聽ゆ。竟に侵れハ妻時暗處身を暗處御は被て昇り。室々又那直あ
盜鬼の所在を索めぬ生拘。親と良人共に手を折エを疑ひ辟て俱と先非で懲原ん
このさ
這義をひひを。とつれて嘗て現れ大貴人信。歎賞して連微妙だ賢才の教誨。ソドモ
理あり遂莫教。徒ひ。僕門。这里。生てゆる。各其方のうよ及ん身を衆。仁と做そ義侠
セキ。俺们。心よれを忍んで。とよを重々推返して。その父も豫て思念あり。願うるが身達
このむろ。スベ。這室の壁を内より突鎧ちて背門うち坐す。汝家ハ又這室を領て。妻をゆり乱倒
きく人のまゝと候ん。死ぬよう親の良人の皆も。駆け聚ひて。喚活さうと向ぐ奴家則
詭。ス。室を次ぐ。小廝们よ夕飯を。食す。と。云ふ。と。零時の程奴家。代りて。家類

う。那里と目次て後ふか那旅人們の術やあらん室の内より錦縫の索を解捨壁を
段々出で這方へまぶれ、奴家へ吐嗟と騒ぎ人と喧嘩起て程めかども近
處を椎林とせし折より角と攢れて縁頬すら落て黑白も知らぬて云々件の旅人勿
驚はぬ家々の間よ措しまりと行裏表て探合て逃亡其日時のうちの貞吉酒
宣安庵宿すは多暇を拂えぬ今すら人の心めやあり危険ぞあひよとの
久未支みせれ、奴家よ咎められて快き壁と急しう女子よ锦縫處處才難は現八
大角のいと感ぜ推辞よ由うが事は仕やんとそ紙包せうち扇とて手をとてを
兩方と腰よ佩るる中よ現八を行東表と駆ひて四下と見えずの盒舟を捲よ初め是究
竟と今よ抗て力を極ひて室の壁と突撞と三尺をう又大角より傍く縛と拵へたれ
よもと重戸よも對ひ再生の因と己の義と演る廻を辭別猶豫と人よ知れど云々
案此詞程秋の日暮にて隈ゑ月影に沿ひて便り萬巒垣の蔭よ深ひて出でゆる。

重戸へ寢安時目送るを不す室戸引よきと鎮むる縁頬の頭近くかすめて髪
搔乱一櫛笄と捨て地上に臥てす。皆下東戸へ朝す。いはれが家尊の大入の勇悍を旨と
この人の虚失と猜疑とあ思足りてちとせん縊襦袴の足袖の此被御と云
とある。那人達が眞の盜見すべや倘亦眞の盜見すとお大集まつて衣箱の簷
を復す一物多罪を置懲と追放ちひひ悲ある人とひれんと諫めと用ひぬが已
とひと胆太くかず子不怪と計り罪怕る。てとあら。と母刀自の命日より死の人を両箇まじ
殺し追玉鶯(真福)の後まんと計り。と金のとひげて弥陀唱爲持念を
凝モ夕向廻の千種と鳴ぐ虫の音とれすかの温冷み病薬りと墨をと御向
夕飯とくよとひ詰と退せる夢介壁藏兩個の小廊がてまつて今かと云々と遅
いとひげ。詰今両頭余程の大銅現八大村大角兩個の勇士の賢女重戸が惣代忠
惣の資助より必死と免れ水垣が宿所の背門通うて縄を走りぬるを色正

の事所行を。武士も本意あると送る事なく、又那盜見の往方を尋ね
生拘り。奪ひて。这里は帰らず主僕の密ひと解せらるゝ何の日か耻と雪ん今宵八
千住の宿を投す。久月商議をとどけられども連する路次をのむたる夜に五鼓。千住に
アリ。千住の河邊より舟を出でし前岸へ渡る。とく屢々船と喚れども夜川の渡をとけ
る。這方の岸より船あり。答ひゆのりあれば、但す堤より岸。彼と見一旦に一町あまり
河上より舟脇より船あり。船を寄せて。喚れども水際近く聲をた
る船の之内の人舟をねじて寂寥とも答あるれわいと焦燥を現。人を逸ぐ。
大角をえぐり。这里あひ皆同師處。と。猶豫せ。氷坦がヨリ勢を打。趕毛毛をあらや
も。余ふ難夷よ。及べ。俺那船より乗組り。漕寄せず。和殿と俱み渡る。水際より找え
とぞきの子。太角鎮を。度まびと答ひ。がば現ハを櫛刀よ。櫛と。身を跳らす。岸を離れて
散る。船より乗組り。蒿を扱ふと。程より船せらの内より人あり。盜鬼等と喚禁

。とまくあら。苦抵抗の猛然と見れ。告一個の墨署。走菟りて現八の利是丁と振る。とあら。と
身を淪て振拂んと角ひる程もあせ。又一人左のさう衝と生す組んと。我む左右の撞く。
遠方の岸より大角。も見て驚く。再度の大角。ひで力で大飼。勑して仇を振ふと。とすも
かひおれ。陸と水浅瀬を。度まびと彼此と走入り。まつれ。不知案内。き。夜川の深浅測難
ノ村胆の心を。大飼の。便りを。かぢ。今程より現人を敵と左を引受。熟得の表法。
御て盡せり。搖めく船より水を下す。枝子を踏留め。且く挑争。ハ折り。靈薦。度ま。其雲を
拂ふ。秋の月の清光。夜水を照す。金波流。細鱗跳。冰輪激。瀨。儀。大玉兔。
競り。晚潮落。在天變化。瞬間。隠す。月光。三人に面と。信と。共す。騒ぐ。
声も。齋一。和殿。大飼。現八。沙也。沙也。二兄。大飼。自然。道算。信乃
ある。句。ある。と。果を。まよ。捉る。捕れ。と。解く。組を。緩す。糾糸の。結び。義と
馴な長。別を。今ある環。ある。迷の。秋。び。比。人。ナ。カ。麻。與。民。甲斐。も。世。を。ま。な。登



出で笑ひす。大角とも對ひ。大村生立疲れては、僕不憚いかばん。既に這里す。そぞ如く
某船より來り。と。大村生立。彼にては、役怪の福也。料ども大塚大山二兄。第ニ再會をす。狀々對面
きみかと対るを大角も。て。互に歎く。と。また。初和殿が船の内を敵と左右に引廻る勝負と
を。測り難く。最大う氣を同か。を。處する。及程。大。健身。山里。生云月。水枝。自由。重んじられ
鄙語。又。南水。聞誦。似。舞。不。便。り。ても。あ。が。と。悉。も。解。け。和睦。先景。行
よ。も。ひ。そ。か。よ。鳥。と。轉。ひ。と。歎。ひ。と。有。り。ぬ。と。の。憂。と。と。不。同。と。信。方。と。道。節。も。岸。よ。登。く
恭。身。邊。え。来。ゆ。と。大。角。奉。と。找。迎。と。大。塚。大。山。二。賢。兄。東。大。村。社。儀。と。と。大。飼。生。示
業。和。と。景。仰。懷。い。已。と。俱。よ。諸。國。と。巡。り。一。甲。斐。今。宵。画。會。の。歌。ひ。を。競。金。モ。と。幸。ひ
是。よ。優。ひ。の。と。ソ。ハ。信。方。道。節。も。礼。を。返。と。却。り。よ。や。大。村。生。の。來。歷。素。生。が。多。詳。り。有
る。俺们。異。於。ぬ。手。あり。疾。ゆ。と。テ。ソ。レ。が。亦。是。異。姓。の。家。弟。と。生。れ。時。日。同。か。そ。異
御。成。長。ま。ち。と。も。人。テ。と。後。更。變。を。分。ち。禍。福。苦。樂。を。共。ゆ。皆。同。禱。同。禱。同。禱。死。と

すいどいで又那盜鬼を捉へて恥と雪んとぞよき。間の身を暗くして門客々と睨む
这里まへる。ものをと猜へぬと告る詞の本樂りけ。復も嗟嘆す堪へと信乃道節
つゝと。やつて憶ひを目と目と合へて。奇きかなる如く。大村大飼兩兄弟の話説み就て又一條の
語説あり且少しきと慰め。送代の説示を。の顛末を原すよ。遣朝信乃道節り栗橋を
旅舍を出まく千住堤よりはよ。既す日暮より河を前面へうし渡り。千住より宿を投んと。航
船を索ひ。航場より船うて。这里に繋がる。吉船より船舟兩個の皆高師。何處より東西を論
そそ云々と。程々信乃道節を喰くひ。うち駕馬たる声があわく。夜川へ
渡まぬ。栗度自ら。船貨ヨリ賜ふ。定鞆を渡り。あわせん。誘々乗せ。人とて船と擣り寄り。よ
信乃道節り。遙く往く。件の船よ。ち無事。お皆高師。又。又。空鞆を渡。船うれ。客人達と
の。余せ。わざと。人よそれとて歎く。前画の上岸へ。曹寄も。權且。苦の下よ。臥。皆る。
まひと。説を信乃へ。訴か。と。道節の袂を引ひて。道節の袂を引ひて。道節の袂を引ひて。

折河近御の人の東西をたぬくも屡々す。冥訓終す免をと武藝をよ長む刀森们
とあ布下虎鬚と曳損ひ細められて後悔の立つるけれども今よう野心を改め、法師ある
らへとまのこ願ふる慈眼視衆生の佛心を無むひと許させりと同音は哀請すと已うと
信方がナツの冷笑で俺が這河島送みまうし折若们が這船を口官は東西を論じて云て
まのれきてより岸の渡すと今をひかたぬく東西を分えとす。その損益を論ずるまん遠き甚むと
きせあま。又責向れど在る所隱る所とるが如く野良平がいじまう御推量は遅れどさくは河太郎と
ゆきもの石原、どう一歩も上へま。セビ共に北の御士の宿所を覗ひ背門うちをぬく折河太郎が急速く其頭をぬく衣箱と
あまうぬく見ゆる寄りまぐ東西をぬ取ると鉢や小壼を出され、籠籠籠を
可へ旅やく此の送くる被包を荷樓ひて走る武士が畢竟に堤の頭を河太郎が
衣箱を卸して聴ひて聴ひてふ援を泊めて那武士を撃て仆を拂ふか。もと停ま猛者をいわゆる矢祭
左右へ投伏され命も傷み危うく阿太郎も小可もまづ修河を遠く辛くは死を飛ばす侍る折ふも

おれのまかのが おとこひのう おとこひのう おとこひのう
小可ハ又那盃士の祇包と檜櫻あマ逃げとも河太郎は即指しる衣箱包も捨て再会する
あるを身うち是より河太郎ハ小可のあらむ祇包のしる金と二分みせよとす。小舟没議度無事
那衣箱を捨てあらむ行を此御共三分計そへかねども俺タ多至る金と半分金を取せ
答と推却其他亦諸多を喧嘩勝手をもとめを那折り邊を備海力を勧業和郎包と合獲
されて命果氣きせばを急のあらむ色とへ合は留めとを俺功へ然と答へ云て
論を下過て熱をたまひ只見島許の説きへ四も五も全てヨリ分りと論と果あり折
とのまちとく。おとこひのう おとこひのう おとこひのう
刀詰達玉喰子化口を鉗ら又推一極美と名の胸等用の大物と細び化粧皆画餅
ありや百包の隠七船當金を方詰達玉をえ命と助けたまとひも首を道筋の眼を
ひらまつて声帶立す。遣奴們ハ苦しき隨は我們と盗賊の皮肉毒と云ふ歎かの如に畜生は理義で
詫た無益なりハ割引と積思の報ひをひねぞと敷園悍く身を起て侵ひに靈時と
外ふ。おとこひのう おとこひのう おとこひのう
推却おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう
今遣奴們を推却斬り輒に所爲れも素ナニ吉旅えれ程遠くの村長おとこひのう

おとこひのう おとこひのう おとこひのう
車牽度も。地方法度は儘一うが遣奴們穴飼手行裏表本の王と返一遣と縛の
便宜あんか性急方ハ要をなすをやとひと道筋語るひとからぶ船と山岸と寄モ。
おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう
世に來一里へ赴ん同是あ行裏の内燃檢のくとやへ然と駆く野良牛が板子の下に隠し
おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう
措さ祇包を築出へくら投人つ折岸残離れ。船をぬぐ地附と棄すのりと信乃
道筋の駕馬と。亦是野良平河太郎が火家の人々とてとひひはれが等を擬議せ道筋
おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう
奉五度推捕元とせ程の信乃の亦若屋形の内りゆて共信よ捕捕人と桃らるるの時明
月雲々今も雲妻時脣景をひすえよ半と折角ハ信乃道筋の人の現人りと正筋
をも。現八も遠面敵の信乃道筋をもと知ふ同士駆手をさうりと雲急地の月と吐き光
限をせりと送は回説得一す方僅兩會の本意を逐て言話説お及ぶ然ハ信乃道筋の件の緒
おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう
趣と大角と現ハと送むゆく説示へと仕しハ類々すとあら野良平が職物の大村の行
つま。おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう おとこひのう
裏不す穗北の御士の衣箱を大耦合す千往復へ脚指と河太郎へ又に遣をみて。

送指紋る衣箱と襦袴の袖の紋も分明でねが良箱の主耶。夏秋祭は繕れられて不慮の難免よりかは神明佛陀の冥助よりけん一夜を過さず若仰をそや遠所より覆方へ是は地異性の兄弟の賜ゆるを知らばよと舜せうく罵せば野良平と河太郎はも駆逐ひ仰視て哀請んとおひけん立てる膝を折布す。跪んとヤ程々現は亦我寄ア二賊と被地と蹴倒し思ふ塊を声高きよ這盜兒们。何ぞするに見とすや若仰故あく俺ミ永恵不因れた。美里のるひと做えども寛大神聖と雪る因果の環の旅を。善惡必應報爾天罰忘れ。吾あべれらひ知らずと四馬責え。躁躍らんとまく。大畜忌は推禁め。アよ火飼生等も余り奉仕俺仰が濡衣を乾モ時至る。那噴氣洩えんとす撻ひ無る危所効焉。ア大塚大山簡の理會はも儘一ぬを。ヒヒハ現ハ有理と心く舊の處退院。當時信乃通幕と大角みうち對ひ。大村和殿の竊れる行裏の這里より快展檢を受取のへといひ遅延。袱包と大角ハ受戴是る二兄の賜へ色の内あへ當用の爲よと出一置くハ九百の金のゆ。

被看の衣もまたよゐぬと云ふ裏とも惜しよ足らず繫小要るゝ一袱又藏め一襖の木主す。
いそとひくも遠く袱包を披ひてそれへ東西皆あり總て水は濡ら方のことをもる半分へ乾る。
當田下大角へ実父母難父母兩家の木主を恭り取生ゞ小高に处み图を有。うち對ひ合掌と
手をまね。○手をさる。○手をさる。○手をさる。○手をさる。○手をさる。○手をさる。○手をさる。
涙を流し額てつる某疎忽の失ふを詫ふ四庫の靈位と賊人のよき汚れく贋河水は
濡れと。○手をさる。○手をさる。○手をさる。○手をさる。○手をさる。○手をさる。○手をさる。
まち歎泣てひよ料り未見の義兄弟の資助より一尊の靈位を迎取。よどゆるを先
非て許を多ひね。弥陀仏を生むと唱てる。ま義殊更老矣こそ礼を儀而誠心を信乃道
第現ハモ齊一感。倡よ稱々謹慎德行より治ミ。君子とを譽め既而一と大角の親の木
主を拜。訖りて又袱を包みかか道筋へ照る月をほと瞻仰す。嘯大飼大村生千万言す
蓋いかか。過去來の話説へ迷ひ安まく碎れども矢外目今之意務す。を夜ひそや更ふあらぬ
る其盜兒们と穢れの子せへ章ゆくゆく和殿門の輿は寛廣の轍を雪ん候て準備を多めと奉

を。かくは
太も。趕稠らへて先々をもる大家の賊と謀合へて不和が起ると欲をひく革鎧と銀んを
のべ
罵り。鎧を打て面も掉らし大角が胸前を刺すと方終。這辯の為体又有種力亦三丈
一。陰をと
士と強人ことあり。久些も擬議せ共に俗を持て鎧を振内め。そや現八はうち對ふ勢ひ酒
虎の暴るよ如く當る。さもわざりて現八の大角も騒と敵を引受け電光石火と衝た歩と鎧の
不良。あらわし。やうぐ。そむけ。よし。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。
刃頭と彼此と差錯。反輪。一上一下と術を盡す。修煉の罰眺瞬く間。且く敵を夜勞する。
どくも。あたき。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。
大角ハ既よや脱糞を夏糞鎧の蛭巻すと机を割りと張今至ゆの掲れ現八亦有種の鎧を
うり。あらわし。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。
豪哩と踏落と透と共に引組す又枯木の桃弓。かす。二階松山城と大村蟹守の角義を
まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。
極度。就中蟹捕よせ。敵手と稱え。大飼大村両雄よ掲を取。死よりの足元。既す。夏糞
どくも。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。
大角。組伏れ有種。現ハ。膝。布。呻。呼。の。反復。え。と。掉。れ。とも。皆。も。脣。も。筋。所。を。掉。れ。く。
まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。まつた。
然一も食よ。暴。雁鳥の羽節の下。野鷹。よう。脆。か。と。羨。か。ふ。自。憤。す。堪。ま。け。ほ。
を。も。あらわし。の。ま。ま。と。つ。か。ん。と。き。め。
弓程。百。夏。弓。と。發。い。ま。る。衆。人。ア。天。士。の。刀。接。と。氷。垣。落。鷹。背。肩。の。烈。火。燒。せ。ま。

徳之
吉



モロヒ カルヒト
進羅ミシ衆人ハ

里見八犬傳第八輯卷之五 終

天保三年

春

之月十六日燈下稿了

附錄于五月十四日追稿之

著作堂文集

筆

福

硯

齋

大吉利